

「ふるさと伝承館」と昔話

野 村 敬 子

一、「ふるさと伝承館」

近時は便利なことが、全て「善」と考えらがちである。何でも手軽に求めたいものを得られる安直さが、人々の好む消費生活となつてゐる。その傾向は生活文化全体に浸透し、昔話の周縁も決して例外ではない。ちなみに各地での観光昔話。観光バスが止まる度に昔話の話者が出向き、客の観光時間に合わせて語りをするなどは正にその例であろう。観光客は金銭で得た「昔話時間」に、あたかもインスタント食品のような手頃さで、耳慣れない方言の語りから、ほどほどの田舎、そこはかとない懐かしさ、見失つてしまつた素朴な優しさを、ほんのり味うものようだ。観光客は、まるで人工庭園を見るように、供される昔話に宿る遠い光の美しさを讚え、そして通り過ぎて行く。通過する人々にとつては全て自分と無縁であるが故に、それら昔話は全てが懐かしく、悉く美しいのであろう。語り手は居るもののか見えない、奇妙な現代の語り風景である。

山形県最上郡真室川町の「ふるさと伝承館」を訪ねる折々、筆者はバスの座席で決まって、こんな想いを反芻する。車窓に覆い被さる繁りを幾度も払いながらバスは山道を迂回し、一路「ふるさと伝

承館」へと向かう。岩を噛む流れ。山際近く点在する集落を右に左に見て、峠を下りると遙かに鳥海山を望む。厳しく美しい風土の陰影であった。この道筋からだけでも、便利主義とは大いに異なる「ふるさと伝承館」設立事情が浮き彫りにされる。それは冬枯れの風景の中で、一段と明らかな現実として目を庄する。バスの窓越しでさえも、吹雪の季節を雪山に接して暮らす人々の緊張が伝わってくる。屈折する風土の厳しさからは、現代も人力の及ばない、大いなるものの存在に気付かせられる。この大いなるものへの心情、超自然との対話こそは真室川の昔話が内包してきた、最も大切なものと言えよう。時代が変わつても、この風土がある限り、それは変わることがない。

館へ行く道は、それら超自然的な心情世界との出会いの場として、採訪調査に不可欠の要件となつてゐる。人知人力の及ばない領域への視線は、伝承基盤や昔話そのものの理解に、須らく求められるべきであろう。館は最も山かいの土地、平枝集落に設立されている。その佇まいは飽くまでも山に添い、館内も人目を楽しませる観光的配慮はない。山近み、山に寄り、蒼く冴えざえと鎮まる風景のなかに、どつしりと建つ館は外来者に阿る手軽さを微塵も感じさせなかつた。

真室川は林野率八六・八パーセントの農林業の町。人口一万二千人。山形県湖北に位置する町である。「ふるさと伝承館」は一九九二年に落成した。町政が「ふるさと創生」事業に、昔話、伝説、童唄、民謡、番榮、炭焼き等の伝承文化保存継承を謳い、その活動拠点として当館が建築された。館の内部は囲炉裏を持つ、極めて平凡な田

の字型間取り。特産の「平枝木炭」が並ぶ土間を介して、多目的の小部屋もある。デザインに潜む、関西への憧れが微笑ましい。この地は最上川に注ぐ河川流域で、古くは水運で酒田と結ばれていた。ひいては京大阪の文化の香りもする土地柄である。館に内在する西への憧憬は、日本海文化の消長として興味深い。館では誰でも靴を脱ぎ、炉端に座り、強く集中したならば、心象に沈潜する自己の昔話と出会える。もし、そこで他者との出会いがあるとしたら、即座に炉辺語りが楽しめよう。しんしんと降る雪の日は、囲炉裏火を囲んでの夜語りも夢ではない。これら館の存在は唯、昔話が昔話であることへの必要を素朴に満たすだけである。美しく、荒々しく、人々を震撼させて止まない風土の呼び声。そして淡く、ほのかに揺れる憧れを秘めながら、炉端は人々を語り本来の世界へ誘い込む。

二、ある「世間話」

「ふるさと伝承館」は湧水の匂い。樹々の触れ合う吐息が聞こえそうだ。広い板敷きの炉辺を磨いたような風が渡る。館の語り時空が自然の共鳴に呼び覚ますのは、人々が長い間培った民俗の思考であった。この地は自然と自然を司るもの的存在を知る。それを証すかのように、館の建設工事が始まった頃から、ある「世間話」が聴かれるようになつた。例えば一九九二年春の採集資料では次のようにある。（話者、一九四五年生まれ、男）

「△△から聞いたげんとも、黙つてろよ。あのな。或ときよ、□□のオナカマどさよ。ヤンマノカミサマたつてな。憑いでだぞ。『お山は裾風の音が煩くて、安んじて居らんねぞ。どうも山の下が、俄かに逆さ風吹ぐようでな。ヤマノカミは山の下で遊ばねぞ。とでも

かなわねぞ』て、言つたなだぞ。憑いでよ。山ザワザワと揺れでガラガラと石だの丸太だの落ちてきてだぞ。オナカマさよ、何回も口たづなだぞ。オナカマほんでも言わないでいたど。平枝さほれ、ダメダエビ建つてあるもんでや。あそこだて、直ぐ分かつたもんで。ほしてよ、大沢の川の所を歩いていたれば、こわくて（だるくて）あご（歩み）つらんねぐ（進まない）なつたけど。何時間も川端さねまつて（座つて）車で通つた人がら、家さ連れて行つて貰つたなだぞ。山の下で何かて、音立てているもんだし、ヤマノカミサマ氣悪くして、平枝さ来るな嫌んだて言つたなだぞ。建ててあるいちらん（いる間中）オナカマ病んでは、もんじや無えわ。ほんで山揺れるもん、番菜の物も、山の上憚つて、そざ入れねなだぞ」

ある日、オナカマ（民間巫女）に山の神が憑いて、暗に伝承館設立に異を唱え、山下に降るのが、不本意と伝えた話をしている。オナカマがそれを言わずに居たために、重い病を得たといふ。密やかに、しかし如何にもそれらしく、この話は人々の回りを巡つた。△

△も□□も実在の名称で、現に民間巫女は病中であつた。それ故に一層この話は真実味を加えた。つい先年迄、この土地は春秋に年中行事としてオナカマを呼んでカミオロンが行われていた。カミガミはオナカマの口を通して出現し、集落と人々の運命、禍福を予知。予見した。これら人知の及ばない、大いなるものの存在を感じ、身を委ね、カミの意志を絶えず意識する発想は、久しく真室川の人々が持ちこたえた、民俗そのものの思考であつた。例の世間話が波及する側面には、人々が基層体験として持つカミへの畏れが垣間見える。そして本来、館と番菜など、神事は無関係であつたとして

も、世間話は無責任に「だからヤンマノカミサマの意思どおり、番樂行事は従前のまま、獅子頭も山の社に、何ら変わらずにいる」と追加される。更には大いなるものに憚つて「山が荒れると悪いので、番樂の品々を館に持ち込む『話』さえしてはならない」と人々に言わせる。民俗思考を翼として飛翔する、これら世間話の生命力。菅江眞澄『駿夷喧辭篇』にも同様の話がある。

世間話の楽しさは、そこに在る実体との抵触をも顧みず、したたかにまで実態に沿う情報の要素を孕むことである。もしあるとするならば、世間話の仕掛け人は当地のカミ観念を熟知して作動させ、山懐の設定工事反対に格好の話柄を提供したことになる。何と見事に手際であることか。しかし一方で、世間話が半信半疑の虚実の狭間を行き交った波動からは、山間の「ふるさと伝承館」が完成以前、既にカミの去來する領域・場所として意識化され、民俗の濃い色彩に染め上げられた事を知らされる。そこでは世間話発生こそが、この地が生きて機能する口承文芸の律動を内包する、何よりの証左となるに違いない。山中にキツネ、ムジナ、イタチ、ヘビ、ホトトギス、ヤマバトなどなど、美形の山の神や天狗までも栖まわせて、人々は真室川の虚構世界を紡いできた。その意味からも既に現代の世間話を纏う「ふるさと伝承館」は向後、超自然と人々の瑞々しい回路の象徴として、極めて興味深い存在となる筈である。

三、『真室川町昔話集』と「ビデオ収録」

正直言つて筆者は町役場の「ふるさと創生」昔話事業に、懸念を抱かない訳ではなかった。昔話は飽くまでも、行政とは無縁のものに違いない。しかし筆者の真室川昔話継続調査研究は、それらと深

く関わることになった。その地が筆者の故郷であったからだ。そして四半世紀以上の調査を踏まえ、聴き・伝えの継承母体に危機感を募らせたからでもあった。切迫した想いに駆り立てられ、筆者は故郷の伝承者たちと、かけがえのない昔話の運命について考えることになった。それが旧町民 筆者が持つ、唯一の理論と方法であった。鮮やかな呼応であった。伝承者たちの繼承への意欲は確然として見事。それは丁度、埋もれ火が刺激で瞬時に燃え上がるよう、激しい炸裂を見せた。その「ふるさと創生」昔話実践の手始めに、筆者は東京から信頼する「聴き耳」を運んだ。それは真室川昔話の現況に不足する「耳」への問題提起であった。子供に語り聴かせの活動を続けながら、昔話研究を続ける「ふきのとう」主宰・杉浦邦子を同道した。以来、彼女を核に現代語りの風が吹き込むのであるが、「ふるさと創生」昔話は最初から、時代に開いた窓を持った。筆者は常々語り・聴く人間関係に注目しているが、その後も杉浦は真室川に通い続けて、伝承者たちと強い信頼で結ばれるようになった。伝承者たちは杉浦に對して「準真室川町民」の名で親しみ、胸襟を開いて感情豊かな語りをする。基礎作業を経て、最初の取り組みは「ふるさと伝承館」に先駆けた、ふるさと創生昔話集『真室川町昔話集』の刊行であった。集の帶に、次の文章が附されている。出版の意図が知られよう。

「山形県最上郡真室川町ふるさと創生昔話への試み。真室川に生まれ育ち、住み暮らす人々の語り記した、純粹のふるさと口語りシリーズ第一弾。町民の愛情と熱意が編み上げた、音読のための昔話記録。文字の向こうに、ほんものの「ふるさと」が見える。あなた

自身を証す、美しい日本語との出会いが叶えられる一冊」

このシリーズ刊行は一九九三年三月の六巻まで、早いテンポで続けられた。集は町村合併以前の町村毎に、各二冊ずつ編まれている。方言特徴に焦点を合わせ、言葉と心情の違う領域毎に、安楽城・及位・真室川各編に分かれている。これらは引用文にあるように、方言語りを読者の声に戻して読むための、音読み話テクストとして作られている。読者自らの声で、口承の町民芸発見への旅立ちを目指むのである。それこそが「ふるさと創生昔話集」の所以であった。

全巻併せて三一五話を収載。七十人の伝承者が名を連ねる。出版基礎調査では収載昔話の四倍弱の資料が集積されている。挿し絵は真室川在住の画家佐藤正弥が担当した。生まれ育った地なればこそその色彩と形象が特徴で、とりわけあまんじやく・天狗や河童などの表現には、独自の主張がある。

ところで注目すべきは昔話集基礎資料のビデオ収録であろう。町役場職員・高橋良和らが精力的にビデオカメラで、昔話動態を記録化した。当初から、昔話とそれを語る伝承者、聞き手、語りの場をライブとして収録した。一九九〇年二月号「広報まむろがわ」には、炉端語りの収録風景写真と次の文章が載る。「むかしむかし、あつたけどー。畠屋裏を囮みながらの昔話。以前にはどこにでも見られた光景ですが、現在ではほとんど見ることができません。(中略)年々語り手がすくなくなつてお、町では後世に伝える資料とビデオに収録する計画です」「昔話の語り手をご紹介ください」その後も「語り手発見」の呼びかけ回覧文書が見られる。そして、これに応じる人々が続いた。それらの人々には古態を重んじる心が残され

ていた。如何にも、かつて生産生活に濃密な伝承を要した真室川らしく、昔話の規矩を墨守する。「昼むかしはネズミに小便かけられると断固、日中の語りを拒否し、スタッフは深更に及ぶ収録を余儀なくされたりもした。終わって、外は厳しい寒夜。降雪に車が、すっぽりと埋まつて居ることも希ではなかつた。

凍てつく夜の底で、昔話の禁忌を守つて行われる語りには、現代語りへの警鐘も聴きとつた。そこでは大いなるものと絶えず対峙し、協和し、虚構に身を投じ、心を駆り立て、招き寄せる語りの陶酔があつた。注目すべきは大いなるものと交流する「真実、力ある言葉としての方言」の存在感であった。語りの陶酔には、自然の中で人が生きるという本然的な意味を内包させた。現代社会が積み残した、畏れを知る心性の瑞々しさが横溢した。昔話が観光化され、單なるオハナシや舞台芸となり、生活母体から切り離される無謀さを実感せられる。これら町民の古態に宿る精神を認識し、日々の暮らしに想いを馳せる時、現代が持ち合わせる機能優先、有形文化志向は、明らかな反省材料となつた。ビデオ収録スタッフの一人、町役場職員・佐藤喜典は「昔話とむらおこし」(「最上・真室川の伝承」「民話と文学」23号)で、昔話の人間関係に可能性を探りつつ、現代の喪失について触れ、「このような社会変化(ライフ・スタイルの変化)に「心の豊かさと物の豊かさの調和」を目指し、「金・物の犠牲になつた伝統的な文化を『蘇生』することから始めなければならぬ」と言う。スタッフが背負つたものの重さは、測り知れない。

四、《手作りの紙芝居》まつり

「ふるさと伝承館」は子供たちにも、昔話との出会いの場となつた。現在、真室川の子供の殆どが昔話を聴いている。館の他にも学校、公民館、保育所、幼稚園など、子供たちは必ず町の何処かでの伝承体験をもつていて。いずれ全町民が、伝承体験を有する時代が到来することになるう。昔話ビデオ収録の伝承者たちが「真室川民話の会」(会長 渡部佐重)を結成し、子供たちに急接近したのであつた。そのキーワードは「幼児体験」であつた。伝承者は自らの伝承記憶が、幼い心に根ざしていることを知つている。その記憶が優れて美しく、人格形成に深く関わることを、彼らは実体験とするのである。

振り返つて、十年前、筆者は真室川で対面調査を試みた。中で「昔話を聴いたことがない」子供が、七四パーセントの当地事情に動転した。しかし分析調査からは家庭の構図や、人間関係、テレビ時間の増加、宿題時間の増加、遊び・テレビゲームなどの、語りに遠ざかる内因を抽出した。七四パーセントは至極当たり前の現実なのであつた。しかし昔話資料に拠れば、真室川は百話語りの伝承者を擁する町である。かつて真室川昔話資料集を報告した筆者には、研究と実態の隔絶が刺のよう突き刺さってきた。子供たちは昔話の透明な輝きも、語り空間の香り高さも、先人たちから伝えられていなかつた。何よりも対面文芸への、ときめきを知らなかつた。「真室川民話の会」の活動は、それら昔話の現状に対する挑戦でもあつた。急接近は斬新な手法をもつてした。それは「脱血縁」の語りであった。民俗社会が泥濘のように嵌まり込み、苦渋する、血縁

・血の、しがらみを超える語りであつた。そしてそれは狭義の「地縁」をも超えた。集落を違える伝承者が、聴き手の幼い者と交叉する。純粋に、人と人の出会いを重ね、語り・聴く感動が共鳴した。中で、たまたま語りの場を失つた祖父母と、聴くことを知らない孫が出会う。かれらは新たな座標で対面し、それぞれの仲間たちとなんだ時間を創造する。心を開放するのであつた。これら創造的時間の営みが更に発展をみせた時、一つの行事を生み出した。子供が伝承体験を紙芝居に証し、積極参加をする「昔話と手作り紙芝居まつり」の行事である。

「今年も『昔話と手作り紙芝居まつり』が開かれ、僕たちも一年から六年まで参加しました。及位からは高橋良雄さんが話者として昔話を語ってくれました。高橋さんは昔話を語る前にならぬ「昼ムガシ」を語つどネズミがら小便ひっかげられつぞ。そんでも良いか」と、言います。今日はどんな話だろう。と、ときどきして高橋さんを見て、思わず身をのりだしてしまいます。みなさん。なぜ昔話が町の行事として取り上げられるようになったのでしょうか。皆さんの生活の中で、昔話を聞く機会が殆ど無くなつたとは思いませんか。僕の父も母も、子供の頃も、そうだったそうです。そのままだったら、どうなるのでしょうか。昔話の語り手は年をとつています。このまま何もしなければ、昔話は僕たちの心の中から消えていつてしまふ恐れがあります。そのように、ならないようにするために、『手作り紙芝居まつり』が開かれるようになつたのではない、かと思います。僕たちの学校でも、紙芝居作りに参加した友達は、そのことに誇りを感じたようです。家に帰つてテレビニュースで、

『手作り紙芝居まつり』が映し出されているのを見ました。嬉しくなりました。(中略)昔話を失うことは町にとって大きな損失です。

僕たちの心のあるさとをなくしてしまうことと同じだと思います。昔話はあるさとの財産です。この宝がいつまでも人の心の中にあります。

続けて欲しいと思います。(小学六年 佐藤裕也)』

これは「真室川町あるさとづくり主張大会」での、「語りつごう昔話を」と題した小学生の発言概略である。中略の箇所には昔話の町としての、宣伝アイデアが示されている。この小学生参加を不可欠とする「昔話と手作り紙芝居まつり」は、企画立案から実践への方法を町役場の昔話集刊行スタッフ・村松勝雄が編み出した。小学生が伝承者による、方言昔話の語り聴かせを経験し、それらのイメージを手作り紙芝居として表現。それを公民館大ホールでスライド化して写し出すが、再度、伝承者の登場があり、スクリーンに合わせて語りを継ぐ。という経過を踏んで観客と小学生が新たな感動体験を共有する試みである。当行事は今秋で七回目を迎える。ほぼ年中行事化し、主張大会発言者のような確固とした想いを育てる小学生が現れてきた。このように「脱血縁」の聞き手にも、伝承者の語りが「血縁」のような聴きとられ方をする様子に目を洗われる。この行事は「日本イベント大賞」に入選するなど話題を集めめた。また『わがすあつけど紙芝居絵本』(筆者編)へと進展した。

五、外国人花嫁と

「あるさと伝承館」は昔話国際化の拠点もある。『フーリピングの民話——山形のおかあさん 須藤オリーブさんの語り』の須藤オリーブ、『明淑さんの むかしむかし』の庄司明淑は、此処で自然と

対話し、人々と語らい、故国昔話を再認識した経験を持つ。二人は配偶者ビザで在日する、所謂外国人花嫁(『口承文藝研究』18号、筆者稿参照)である。外国人花嫁の身边では異文化体験の苦渋が、いろいろに言われてきたが、中で故国文化の顕在化を阻まれての在日に傷つく例が少なくなかつた。筆者は前出二冊の集を編んだが、昔話を彼女たちにおける故国文化の象徴的概念とした。そこでは真室川の伝承者たちが研ぎだしつつある「かけがえのない昔話」の地平を大きな手掛かりとした。明淑は当館で高橋シゲ子・高橋市子ら伝承者たちの語りに触れ、深い想いを味わつたという。そして来日来初めての体験、韓国昔話の日本語語りへと向かうのである。

「あるさと伝承館」は昔話を拠点として、国際化への歩み出しを始めた。一九九三年二月に、当館はユネスコアジアセンターと杉浦邦子の協力で三週間の「アジア民話絵本展」を催した。韓国、中国、フィリピン、タイ、スリランカ、インド、ミャンマーなどの絵本や絵画を展示し、音楽テープも聴かれた。同時に『フーリピングの民話』の挿し絵原画展も行い、外国人花嫁の故国文化を知るための、多くのアジア情報を盛り込んだ。会場で花嫁たちはハングルや、タガログ語で民話を読んだ。子供を連れて、六時間会場に居続けたフィリピング花嫁の姿もあった。もうすぐ学齢に達する二世が、初めて母の国の文字を体験するなどした。農村のヨメ不足対策として、当方は日本最初の外国人花嫁を迎えたが、近年もアジア女性を配偶者として国際結婚が進められている。彼女たちの故国文化理解は畢竟、最も今日的な課題に違いない。山里にアジアの予感としての子供たちが育つている。ここでのアジア昔話は、従来の研究領域の

壁を超えた、新たな口承文化と言うべきであろう。一九九二年二月二四日の「毎日新聞」は、子供たちが展示のアジア絵本を読む姿を、写真入りで大きく報道している。また一九九七年十二月六日「朝日新聞」に拠れば、柴田敏子ら伝承者が中国人花嫁母子の故国昔話を聴き、方言で再構成し、彼女たちと日・中両国の言葉で昔話交流する催しも行われている。

總体として真室川の試みは、何処までも心情的であった。昔話が心象の文化で在るが故に、その全てを人間性そのものとして結果させる。向後も、アジア昔話を視座にして「ふるさと伝承館」の実践が約束される。そのを目指し向かうところに齎される未知との対話こそは、この町が二十一世紀を生きる強靭な手掛かりとなる筈である。

(のむら・けいこ／主婦)

● 東京

故郷の語りから現代民話まで

松 谷 みよ子

この広い東京に口承文芸はまた息づいているかと問われれば、たしかにある、と答えた。しかし、私という人間の視点、ということは日本民話の会員の一人としての視点、であること、をまず、お許しいただきたい。

東京に昔話の語り手はあるか。すぐに浮かぶのは西多摩郡檜原村の語り手たちである。高津美保子さんの編著によつて国土社より『檜原の民話』として一九八七年に上梓されたが、そのなかから、倉掛の藤原ツヂ子さんの貧乏神の話を置く。

貧乏神

昔なあ、そこの家は貧乏で、何にもなかつたんだつて。そうして、それでもいくらか持つて、

「何か食ひもん買ひに行つてくる」

とつて、そのおじさんが出て行つたんだつて。そいで出て行つて帰つてきたから、炭を一俵買つてきたから、食べる物がないのに炭を買つてきたから、その奥さん怒つちやつてさあ、何も口もきかずには寝てしまつたんだつて。

そうしたらね、炭をここへいっぱい熾してひとりであたりながらね、

「おい、お前も起きてこいよ、暖かいからなあ、貧乏神も来うよう、暖かいよ。きょうはこんなに火があつて暖かいから、おい、お前も起きて来うよう」

とつて、かかあはもうあて寝しちゃつて起きてこないんだつて。

「貧乏神も来う、貧乏神も来う」

といつたらね、貧乏神が、すんごいひげつらの、すんごいかつこうしたのがね、ぼろをこんなに大きくまとめて、それで貧乏神がやつて來たの。「あたらしてくれろ」とつてね。